

国際政治史部会 3 「国際政治史は刷新されるのか—接近法を問いなおす」
「冷戦世界を考えなおす—社会戦争の時代—」

益田 肇
シンガポール国立大学

要旨

ソビエト連邦が崩壊し、冷戦が終結したとされてからすでに 30 年以上もの年月が経過する。にもかかわらずアジアには冷戦体制が存在するという見方は今でも根強く残っているし、昨今ではアジアにおける「新冷戦」あるいは「第二次冷戦」の可能性が指摘されることも少なくなない。しかし、そもそもまだ十分に検討されていない根本的な問題がある。それは、冷戦とは一体何であったのか、というものだ。普通の人びとに注目して冷戦の歴史を「下から」見直してみた場合、またアジアにおける経験からそれを見直してみた場合、冷戦とはどういったものとして立ち現れるだろうか。本論文では、21 世紀以降の冷戦研究の動向を概観し、その基本的な問題を明らかにしたうえで、私が近年取り組んできたオーラルヒストリー・オンラインアーカイブ「Reconceptualizing the Cold War: On-the-ground Experiences in Asia」設立の経緯と意味を紹介してみたい。

このプロジェクトは、これまで光が当てられてこられなかった普通の人びとの経験に注目することで、アジアにおける冷戦と脱植民地化の歴史を再検証・再構築しようとする試みだ。本論文では、オーラルヒストリーを取り入れ、「小さな歴史」に注目することが、いかに冷戦期アジアに関する従来の歴史像に変化をもたらさうかを論じてみたい。また、こうしたオーラルヒストリー・アプローチの可能性、さらにはそれに付随する危険性をも論じることで、諸刃の剣としての「下からの」歴史の意味、それを書く際の歴史家の役割とその倫理を考えていきたい。最後に、この論文では、国際政治史のあり方を再考する一つの方法として、「社会戦争 (Social warfare)」という枠組みを分析カテゴリーとして使用することなど、五つの提案を行ないたい。

冷戦研究の動向

冷戦史をめぐる近年の研究動向は、一方では勇気づけられるものであり、また一方ではがっかりさせるものでもある。まず朗報から始めるとすれば、過去 20 年間ほどの間に冷戦研究の範囲は驚くほど拡張し、その内容は以前にもまして多様化している¹。まず第一に、英語以外の言語を駆使した研究の増加により、近年の冷戦研究は、米国やヨーロッパの外交史のみならず、アジアから中東、アフリカ、ラテンアメリカまで、地球上のほぼすべての地域を対象とするよう

¹ 冷戦史学史の詳細については以下参照。Masuda Hajimu, “The Early Cold War: Studies of Cold War America in the Twenty-First Century” in Christopher R. W. Dietrich ed., *A Companion to U.S. Foreign Relations: Colonial Era to the Present, Volume II* (Wiley-Blackwell, 2020), 632-651. 1990 年代までの状況をまとめたものとして優れているのは Odd Arne Westad’s *Reviewing the Cold War: Approaches, Interpretations, and Theory* (2000) and Rana Mitter and Patrick Major’s *Across the Blocs: Cold War Cultural and Social History* (2004).

になった²。このため冷戦史は以前のようにアメリカ・ヨーロッパ外交史の一部としてだけでなく、国際史やグローバルヒストリーの一部として捉えられるようになっていく。

第二に、社会的・文化的アプローチのさらなる深化により、冷戦研究は従来の外交史の枠組みにはまったく収まりきらないものとなった。例えば、ゲイやレズビアンから白人至上主義、仏教や福音主義からメキシコ・中国移民、さらにはハリウッドやジャズからヒルトンホテル、子育てから教育、またミニスカート、はたまた男性のインポテンツから女性のオーガズムまで、今では無数の話題が、冷戦に関連したトピックとして議論されるようになった。これらと同時に2000年代から2010年代に顕著になった冷戦研究のなかの新たな流れとして、国内政治に注目するもの、宗教に注目するもの、開発主義に注目するもの、「帝国」に注目するもの——なども挙げられる。もちろん以前から関心の高かった「人種と冷戦」や「ジェンダーと冷戦」といったトピックへの関心も続いている³。

そうしたさまざまな新潮流のなかでもとくに重要と思われるのは、ラテンアメリカ研究における冷戦研究の隆盛だろう。ラテンアメリカ研究者たちは、かつては米国中心的、あるいは二極的だった冷戦研究に、「ラテンアメリカから見た冷戦」という視点を提供してきた。そうした研究者たちは、一般に「ラテンアメリカにおける冷戦」と考えられる現象が、いかにラテンアメリカの国内政治、ローカルな社会紛争、また冷戦以前から引きつづくコロニアルヒストリーと深い関わりを持っていたかを明らかにし、そうすることでラテンアメリカにおける20世紀初頭からの「長い冷戦」という見方を強調してきた⁴。

このように、20世紀初頭や戦間期といった、冷戦以前における冷戦前史やそのルーツへの関心が高まるとともに、冷戦の「始まり」や「終わり」といった時代区分は以前にもましてあやふやなものとなりつつある。この時代区分をめぐる曖昧さが示唆するのは、つまるところ、何をもち「冷戦」とするかが以前ほど明確なものでなくなりつつある、ということだろう。実際、こうして雑観してみてもすぐに気づくのは、かつてのように冷戦史家が明確な争点や対立軸を持っていた時代はとうの昔に過ぎ去ったということ、そして、研究の焦点が、外交史的な意味での冷戦の「起源」を探るものから、そもそもの冷戦の「本質」を問うようなものに移行しつつあるということだ。

つまり、今となつては、「誰が冷戦を始めたか」——つまり、「誰が（米ソのどちらが）悪かったのか」——というような旧来型の問いではなく、「冷戦はいかに作用していたのか」、

² ウッドロウ・ウィルソンセンターの冷戦国際史プロジェクト (CWIHP) は、1990年代なかば以降から、かつては入手不可能であった冷戦の「向こう側」からの史料を大量に収集、公開することに多大な貢献をしてきた。

³ 以下参照 Masuda, “The Early Cold War.” より以前の文化史ターンについては以下参照：Christian G. Appy, *Cold War Constructions: The Political Culture of United States Imperialism, 1945-1966* (2000); and Joel Isaac and Duncan Bell, *Uncertain Empire: American History and the Idea of the Cold War* (2012).

⁴ 例えば以下参照：Gilbert M. Joseph and Daniela Spenser, *In from the Cold: Latin America's New Encounter with the Cold War* (2008); Greg Grandin and Gilbert M. Joseph, *A Century of Revolution: Insurgent and Counterinsurgent Violence during Latin America's Long Cold War* (2010); and Virginia Garrard-Burnett, Mark Atwood Lawrence, and Julio E. Moreno, *Beyond the Eagle's Shadow: New Histories of Latin America's Cold War* (2013).

「そもそも冷戦とは何だったのか」といった問いが掲げられるようになった。したがって、この時期にいくらかの研究者がより根本的な問題を提起し、冷戦の見方を再構築しようとしたことは驚くに当たらない。そうしたものとしては、例えば、脱植民地化の流れから冷戦を再考しようとしたもの（マシュー・コネリー）、開発主義や発展の歴史を強調するもの（エズ・マネラ&スティーブン・マセクラ、サラ・ロレンツィーニ）、ポストコロニアルヒストリーから考えたもの（ホニック・クウォン）、社会装置として、また人びとの社会的抗争としての冷戦世界を描いたもの（益田肇）——などが挙げられる⁵。

要約すれば、21世紀以降の冷戦研究は、つねにその対象領域を拡大しつつ、さらにこれまでにないほど多様化しつつもある、ということが出来る。この間、次から次へと新たな傾向が生まれ、これまでになかったほどの興味や関心が広がりつつある冷戦研究の現況をみれば、一見、喜ばしくも思えてくるだろう。

にもかかわらず、冷戦研究の現状は、いささか期待はずれに終わりつつある、ともいえる。というのは、先にみたように、近年の傾向を「多様化」と特徴づけるならば、それは同時にさまざまな研究の「タコツボ化」と「断絶化」の過程でもあったからだ。言い換えれば、近年私たちが目の当たりにしているのは、研究者の間での役割分担が以前にも増して進みつつあること、そしてその意図せざる結果として、旧来型の冷戦言説がむしろ強化されつつある、ということである。

これがどういうことか説明してみよう。まず、言うまでもなく、国際的アプローチのおかげで、ワシントンやモスクワだけでなく、世界各地の政策決定者たちの外交政策決定過程が明らかにされるようになった。（こうした流れは「New Cold War history」と呼称された）。こうした潮流のなかで、いわゆる第三世界の指導者の多くは、単なる大国の手先や傀儡などではなく、それぞれ独自の意図や目的を持っていたことが明らかにされた。もちろんこうした研究から多くを学ぶことができるのは確かなことで、例えば「尻尾が犬を振り回す」（つまり、小国外交が大国を翻弄する）といった現象が明らかにされてきた。しかし、こうした流れを主導した研究者の関心は、ほぼ例外なく政策立案者と外交政策決定過程のみに向けられており、そうした第三世界の人物政治家や政府高官の物語は、従来の冷戦史の枠組みに挑戦するものというよりは、むしろ単なる追加事項として提示されるものだった。

また先に述べたように、ここ20年来、たしかに社会的・文化的アプローチの隆盛に伴った文献が急増している。しかし、そうした研究の多くは最近までは主に米国かヨーロッパのみを対象

⁵ 以下参照：Matthew Connelly, "Taking off the Cold War lens: visions of North–South conflict during the Algerian War for Independence," *American Historical Review* 105:3 (2000), 739–769; Erez Manela & Stephen J. Macekura eds., *The Development Century: A Global History* (Cambridge University Press, 2018), and Sara Lorenzini, *Global Development: A Cold War History* (Princeton University Press, 2019); Heonik Kwon, *The Other Cold War* (New York: Columbia University Press, 2010); and Masuda Hajimu, *Cold War Crucible: The Korean Conflict and the Postwar World* (Cambridge: Harvard University Press, 2015). 近年の脱植民地化研究をしめすものとして例えば以下参照：Christopher E. Goscha and Christian Ostermann, *Connecting Histories: Decolonization and the Cold War in Southeast Asia* (2009); Leslie James and Elisabeth Leake, *Decolonization and the Cold War: Negotiating Independence* (2015).

としていた。さらに問題なのは、そうした研究の多くが、冷戦のインパクトのみに焦点を当てる傾向が強かったということだ。こうしたアプローチでは、冷戦がいかに社会や文化、普通の人びとの日常生活に影響を及ぼしたかを明らかにすることはできたとしても、その逆の可能性、つまり社会や文化、人びとの生活がいかに冷戦のあり方を規定したのかということを考えることはできない。言い換えれば、冷戦はまるで与えられた条件としてしか、いわば台風か大雨といった気象条件であるかのようにしか立ち現れてこない。私はこれを「冷戦お天気史観」と呼んでいる。研究量という点から見れば、こうした研究がもっとも増加しているのは言うまでもなく、それらからも学ぶべきものは多いが、そうした研究も、従来の冷戦史の枠組みへ挑戦するというよりは、むしろさまざまな出来事の詳細をその枠組みに付け加える、というものだった。

さらに、こうした社会史・文化史家の「冷戦お天気史観」と似通った傾向が、アジア史・地域研究の専門家による近年の冷戦研究にも見られる。一昔前なら、冷戦研究といえば、米国史家かヨーロッパ史家の手によるものだったが、今では多くのアジア史・地域研究専門家が冷戦研究分野に参入している。しかし、こうした研究者の多くは、冷戦がどのようにアジアに広がり、どのようにアジアに影響を与えたか、またアジア各地の社会が冷戦中どのように動員され、武装化されたか、といった側面に注目することが多い。ここでも旧来型の冷戦史の枠組み自体はそのまま受け入れられ、それがいかにアジアで展開したか、といった側面に焦点が当てられることになる⁶。つまり、ここにおいても冷戦は「お天気」として扱われている。私はこれを後に検討する「冷戦アジアの見直し」に対比させる形で、「アジアにおける冷戦」史観と呼んでいる。

ここまで見たように、それぞれの新潮流はそれぞれ問題を抱えているが、さらに悪いことは、これらの研究は別々に行われ、研究の役割分担がより進んだため、全体として冷戦世界に関する昔ながらの見方がより強固になりつつあることだ。それは、1) 大国小国双方の政策立案者の行為が冷戦世界を形成した。2) それは当時の社会や文化、人びとの日常生活に大きな影響を与えた。3) アジアもグローバルな対立に巻き込まれ、その末端の受け皿となった——というものだ。こうした描き方が、あまりに単純で問題含みであることは言うまでもない。一つには、こうした見方を続けることで、政治状況というのは一部の政治指導者が作り上げるもので、文化や社会、人びとの生活は常に受け身の存在と見なされることになる。ゆえに、その逆の可能性、つまり当時の社会や文化、人びとの生活が、政治を規定して、冷戦世界を作り上げたかもしれない可能性には想像力が及ばない。もう一つの問題は、冷戦がヨーロッパに始まり、それが世界に広まった、と見続けることで、アジア、また他の地域が歴史の「受け手」として見なされることになる。ゆえに、アジアが、また他の地域が、いかに冷戦世界の形成に同時的に参加していた事についても想像力が及ばない。

⁶ 「アジアにおける冷戦」アプローチのものとしては次のようなものがある： Tuong Vu and Wasana Wongsurawat's *Dynamics of the Cold War in Asia: Ideology, Identity, and Culture* (2009); Zheng Yangwen, Hong Liu, Michael Szonyi's *The Cold War in Asia: The Battle for Hearts and Minds* (2010); and Tsuyoshi Hasegawa's *The Cold War in East Asia, 1945-1991* (2011).

もっと簡単に言えばこうした見方は、数世紀に渡って存続してきた「偉人中心の物語」と「西洋中心の物語」の再現としても要約できる。というのは、それはもっとも旧来的な社会観と世界観、つまり政治指導者や政府高官を社会の最上層に位置づけるかのような社会観と、西洋を世界の中心に置きつづけるかのような世界観をそれぞれ受け入れることを促すだけだからだ。つまり、冷戦をめぐる最新の研究は、一方で研究範囲の拡張とその内容の多様化をみせながらも、一方では、残念なことに、研究の「タコツボ化」と「断絶化」を生み出してきた。そしてその意図せざる結果とはいえ、旧来式の世界観と社会観を強めることに貢献してしまったのだ。

岐路に立つ冷戦史学

一つ興味深いことがある。それは、2010年代に入ってから、幾人かのハードコア外交史家——そのいずれもがヨーロッパ史家——が、冷戦研究の現状に対し、深い懸念を表明し、今後の研究へ向けての警鐘を鳴らしはじめたのだ。例えばその一例を、ホルガー・ネーリング (Holger Nehring) の苛立ちに見ることができる。彼は、2012年の論文で、近年の「知的・方法論的多元主義」傾向が冷戦研究を軍事・外交といった中心的課題から遠ざけてしまっている、との懸念を表明した。このなかでネーリングは、「冷戦」という言葉があらゆるところに登場し、思いつくものほとんどすべてに適用されているため、研究対象概念としての「冷戦」の意味が、「希薄化」しつつあると苦言を呈した。さらに、社会的・文化的アプローチの隆盛から生まれた近年の冷戦研究の成果を、「概念的にも方法論的にもあいまいなもの」だと切り捨て、次のように嘆いた。「多くの異なる分野から注目を集め、学際的なインスピレーションを得る一方で、冷戦研究は明確な調査対象を失い、また、その主題が何であるかについての明確な概念を失ってしまっている」——と⁷。

同じように、フェデリコ・ロメロ (Federico Romero) の論文「Cold War Historiography at the Crossroads」(2014)も、近年の冷戦研究を「水で割って薄めたよう」と評している。ロメロいわく、近年の冷戦研究は、20世紀後半に起きたほとんどすべてのことを含むようになり、それはあまりにも幅広く、あまりにも多様で、あまりにも包括的な研究分野になってしまっている、とのことだった。こうした状況の打開策として、ロメロは「冷戦」の中心的課題をはっきりとさせることを提唱、冷戦をヨーロッパ中心のイデオロギー対立と限定的に定義しなおしたうえで、ヨーロッパに関するさらなる研究を呼びかけた⁸。したがって、史学史的に言えば、近年の冷戦研究は、「多様化」と「収束化」の岐路に立っている、と要約することができるだろう。

さて、ここからどこに向かって進めばいいのだろうか。一つは、拡張と多様化の流れからすっぱりと手を引き、米国とヨーロッパを中心とした伝統的な冷戦外交史に集中することだろう。まさにネーリングやロメロが提唱するように。その問題は冷戦世界とは何であったかの意味を真剣に、またより根本的に考える機会を失ってしまうことだ。そうなってしまえば、昔ながらの冷戦にまつわる「大きな物語」——つまり政策立案者こそが冷戦世界を作りあげた唯一の主

⁷ Holger Nehring, "What was the Cold War?" *English Historical Review* 127:527 (2012), 923.

⁸ Federico Romero, "Cold War Historiography at the Crossroads," *Cold War History* 14:4 (2014), 685-703.

人公であり、そうして形成された冷戦は社会や文化、人びとの生活に大きな影響を及ぼしたとする物語——を、この語り口の順序でのみ存続させていくことになるだろう。実のところ、そうした考え方は、冷戦真っ只中の20世紀なかば以降から当然と見なされてきた伝統的な見方だし、しかもそれは国際化の流れで台頭したいわゆる「新冷戦史」や、冷戦のインパクトに焦点を絞りがちだった社会・文化的アプローチの隆盛によっても、さらに強固なものとしてきた。とはいえ、これまでの拡張・多様化の流れからあっさり撤退してしまえば、冷戦研究の分野は1990年代以前の旧来型の姿に戻ってしまう。

振り返ってみれば、2000年代以降の研究で見落とされてきたのは次のような側面だ。第一は、社会、文化、そして普通の人びとの生活が、どのように冷戦世界のあり方を条件づけ、形成したかを探ろうとする試み。第二は、アジアの社会と人びとがどのように冷戦世界の形成に参加していたかを検証する試み。第三は、さまざまトピックに関するさまざまなアプローチや知見を統合して、冷戦とは一体何だったのかという大きな問いを熟考する試み。このように、これまでに試みられたことと、いまだに成されなかったことを鑑みると、私たちにできることは、近年の拡張・多様化の流れにから撤退してしまうことなく、むしろそうした雑多、或いは無関係と思われるさまざまな研究から得られた知見や見方を統合して新たなアプローチを考えることのように思われる。

言い換えれば、これまでのように研究の役割分担を是認しつづけるのではなく、また政治家や政府高官の意図や行為のみを検証するのでもなく、むしろ社会や人びとの間で実際に何が起こっていたかを分析することによって冷戦世界の本質を見直してみるべきではないか、ということだ。実際、近年の爆発的な拡張・多様化の流れが全体として示唆しているのは、冷戦の論じ方そのものを変える必要があるということではないだろうか。つまり、冷戦を単に国際政治のうえでの出来事としてだけでなく、社会的・文化的に構築された現象として論じようとするような、新しいタイプの視点が必要とされているのだ。そのような研究を生み出すために、次のような問いが考えられる。

- 冷戦という名のもとで、実際には一体何が争われていたのだろうか。
- 冷戦対立の根底には、どのような社会・文化的対立、ジェンダーをめぐる対立、また地域間や世代間の対立が存在したのだろうか。
- どのような個々人の想い——希望であれ苛立ちであれ——が、共産主義や反共主義といったイデオロギーという形をとって立ち現れていたのだろうか。
- 一見すると互いに無関係に見える世界各地の多くの出来事に、どのような共通性があるのだろうか。
- 冷戦アジアの再考は、どのように冷戦世界そのものを再考する方法として提示していけるのか。

冷戦を考え直す

こうしたことを念頭に置きつつ、私は現在、“Reconceptualizing the Cold War: On-the-ground Experiences in Asia”という、研究プロジェクトを進めている。これは、アジア各地の普通の人びとの体験に焦点を当てたオーラルヒストリー・アーカイブ創設を目指したプロジェ

クトで、そうすることでアジアにおける冷戦と脱植民地化の歴史を考え直してみよう、というものだ。主たる目的は、アジア各地で発生した現実、また想像上のさまざまな抗争を体験した草の根の人びとの声を検討し、その時代の感情や熱狂、恐怖、さまざまな個々の物語をとらえること、そしてそうすることで冷戦や脱植民地化という従来の「大きな物語」を再考することにある。言ってみれば、このプロジェクトは、個々の小さな体験を重視した「下からの歴史」、またアジアから見つめ直した歴史再考の試みとすることができる⁹。

このプロジェクトを通して、私たちは、アジア各地のさまざまな声を伝え、これまで「グローバル冷戦」の一部として見なされてきた「数多くの冷戦 (Many Cold Wars)」に光を当てることを目指している。より正確に言えば、世界的な冷戦の一部として想像されがちながらも、実はローカルに繰り広げられていたアジア各地のさまざまな争いに光を当てるのが、その狙いだ。これを通して、従来の冷戦史の枠組みでは見えにくかったり、曖昧にされてきたさまざまな社会的、文化的、また歴史的な対立や緊張関係に光を当てていきたい。そしてそうすることで、冷戦という「大きな物語」に根本的な疑問を投げかけて、冷戦が本当は一体何だったのか、それを問うことがなぜ今も重要なのかについて考えを深めていきたい。つまり、伝統的な冷戦史や脱植民地化の歴史が、主に大国小国の政治指導者の行為を強調し、おおむね西洋中心の視点を持ちつづけていたのに対し、私たちのプロジェクトはそうした見方を修正する有益な視点を提供することができるのではないかと願っている。

こうした考えのもと、過去三年間ほどの間、シンガポール国立大学で五回の国際会議を開催してきた。これまで、インド、パキスタン、ミャンマー、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、ベトナム、ラオス、カンボジア、台湾、中国、韓国、日本、アメリカ、イギリス、フランスなどから集まった50人以上もの研究者や大学院生らと共同研究を進めてきた。第一回、第二回のコロナ前ワークショップについては、レポートを公開している¹⁰。また、このワークショップで議論した論文をもとに、一冊目の編著を完成させることができた。すべての章は、日本、中国、ベトナム、ラオス、タイ、マレーシア、シンガポール、フィリピン、インドネシア、東ティモール、インドで行われたオーラルヒストリーと現地での資料調査に基づいている。これらの章は、日本語、中国語、ベトナム語、タイ語、ラオス語、インドネシア語、タガログ語などの比較的よく知られたアジア言語だけでなく、マラヤーラム語（インド南部）、モン語（タイ北部）、テトゥム語（東ティモール）など、より多様な現地語をも駆使したもので、この本は実証的にも学說的にも、重要な意味を持つ本になるだろう。

さらに、草の根レベルの人びとの実体験に焦点を当てることで、同書は、一般的には冷戦という「大きな物語」と関連付けられて語られがちだった歴史的出来事——例えば、中国共産革命と文化大革命、ベトナム戦争、インドネシアの大量虐殺（1965-66年）、フィリピンのマルコス戒厳令、インドのナクサライト運動——などの見直しを図っている。これらの章では、こう

⁹ このプロジェクトは次のグラント補助を受けた：The Academic Research Fund Tier 2 (MOE2018-T2-1-138) & Heonik Kwon's "Beyond the Cold War, toward a Community of Asia" プロジェクト (AKS-2016-LAB-2250005)。

¹⁰ 以下参照：Kisho Tsuchiya, "Workshop Report: Reconceptualizing the Cold War: On-the-ground Experiences in Asia, 21-22 May and 22-23 June 2019" <<https://issforum.org/reports/PDF/CR-2019-1.pdf>>.

した大事件を政治的に描写するだけでなく、普通の人びとがこれらの出来事をどのように経験したか、また彼らがどのように「冷戦の物語」をローカルな社会的対立や文化戦争の解決手段として地域的に応用したかを探っている。そうすることで、この本は、20世紀半ば以降のアジア史を新たな視角の下において論じるものとなっている。

ここでいくつかの章を紹介してみたい。例えば、第一章「東ジャワにおける恐怖」という章では、1965年から66年にかけて発生したインドネシアにおける大量殺戮事件を、東ジャワの農村地帯に焦点を当てながら考察している。同章は、出来事のコアは単なる共産主義者・反共産主義者間のイデオロギイ的対立などではなく、また超大国のパワーポリティクスへの反映でもなかったことを論じ、むしろ村落レベルのさまざまな社会集団の間における地域的・歴史的抗争があったこと、またそうした抗争は、経済的格差や宗教心の度合いの違いから、男女関係のあり方をめぐる考え方の違いまで、さまざまな対立に根ざしていたことを明らかにしている。そのため同章では、被害者と加害者双方へのオーラルヒストリー・インタビューに基づいて、この出来事がいかに複雑で、その根がローカル事情や個人関係に深く根ざしたものであったかを示している。

また、第六章「ナクサライト運動を再考する」という章では、インド南部のケララ州に目を向け、一般的には単なる毛沢東主義極左過激主義と見なされてきた運動を再考察している。同章は、マラヤーラム語による膨大な量のオーラルヒストリー・インタビューに基づいて、カースト差別という歴史的に根深い社会的緊張に光を当てている。同章は特に「ジェンミ（地主貴族）」と下位カーストの「アディヴァシ（先住民族）」との間の対立に注目し、冷戦世界の論理が、ここではいかにカーストに基づいた差別と搾取のシステムを変革するために機能したかを検証している。こうした社会的な観点を取りつつ、同章は、ケララ州におけるナクサライト運動の初期の歴史は、「ジェンミ」の差別と搾取に対する「アディバシ」コミュニティの抵抗の歴史でもあったと指摘している。

この本の最後のセクションでは、著名な南米史家と思想史家が各章に対してコメントを述べ、冷戦史、より広い意味では20世紀史全般を再考するにあたっての本書の投げかける意義について論議している。

さらに、この編著にくわえ、2022年4月には、オンライン・オーラルヒストリー・アーカイブ“Reconceptualizing the Cold War: On-the-ground Experiences in Asia”の一般公開にこぎつけることができた <<https://rcw-asia.com>>。私たちのプロジェクトではアジア各地で300件以上ものオーラルヒストリー・インタビューを実施してきたが、これまでにそのうち200件ほどのインタビュー記録をアップロードしてきた。これまでに公開したコレクションには以下のようなものが含まれる。

- Indonesian Mass Killings of 1965–66
- Reconsidering the Naxalite Movement in Kerala, India
- Zainichi Koreans’ Lives in Japan and Two Koreas
- Xiamen’s Fishermen Lives across the Taiwan Strait

- Indigenous Taiwanese Lives in Colonial and Cold War Taiwan
- Exploring Leftist Activism in Northern Thailand
- Everyday Encounters with the Huks in the Philippines, 1942-1957
- Reconsidering the Malaysian Left and Labor, 1960s-1970s
- Khmer Rouge and Its Legacies

このオンライン・アーカイブでは、上記のようにテーマごとにインタビューを探すこともできるし、ウェブサイト内のサーチエンジンを使って検索することもできる。また、ウェブサイト内の地図から探すこともできるようになっている。

それぞれのインタビューは、編著論文のもととなった一次史料でもあり、そのすべてに英語による要約と現地語（もしくは英訳）によるインタビュー全文が掲載されている。また、教室での利用も考えて、議論をすすめるための質問も付け足してある。このオンライン・アーカイブの公開は、これまでかなりの反響を呼んできた。今後も、残りのインタビューを順次公開していくほか、新たなオーラルヒストリー・インタビューも進めていきたい。

冷戦再考に向けた 五つの提言

このプロジェクトは現在も進行中だが、今後、冷戦世界とその歴史を再考していくための五つの提案をしてみたい。

第一点: 分析カテゴリーとしての「社会戦争」

第一は、「社会戦争」を分析カテゴリーとして援用してみることだ。第二次世界大戦後の世界といえば、ついつい冷戦という「大きな物語」を軸に考えてしまいがちだが、そうした一般的な語り口のせいでさまざまなローカルな抗争や緊張関係が見えにくくなってしまっている。ゆえにむしろ、社会的、文化的、宗教的な対立、また人びとの間における不同意などといったさまざまな「社会戦争」にもっと焦点を当ててみたらどうだろうか。そして、アジア各地のさまざまな「社会戦争」を分析し、一見まったく無関係に見えるもの同士の間、何が同時代的に共有されていたのかを考えてみてはどうだろうか。そしてそうした多くの事例を観察・分析したうえで、冷戦と呼ばれる現象が一体何であったかを考えていけないだろうか。

そうすることで、ほぼ20年前にマシュー・コネリーが提案した「冷戦レンズを外す (Taking off the Cold War lens)」という提案のより先を行くことを願っている¹¹。よく知られているように、多くの研究者がこの呼びかけに応じたが、その内容といえばやや期待はずれに終わるものだった。というのは、その後、頻出したのは反植民地闘争史や脱植民地化の過程を描いたものが多く、往々にしてそれぞれの地域の政治指導者を中心にして描き、結果として、それぞれの国のナショナルヒストリーにうまく沿ったものであったからだ。つまり、せっかく冷戦という「大きな物語」を抜け出たかと思えば、今度は現地エリート中心の脱植民地化という「大きな物語」に呑み込まれたようなものだった。こうした状況を乗り越えるためには、単に冷戦レ

¹¹ Connelly, "Taking off the Cold War lens" *American Historical Review* 105:3 (2000), 739–769.

レンズを外すだけでは不十分であるということを率直に受け止める必要がある。大事なのは、そのレンズを外した後に何を見て、それにどうアプローチするか、である。

私たちのプロジェクトが提案したのは、単に「冷戦の物語」を「脱植民地化の物語」に置き換えるのではなく、社会や人びとの間で一体何が起きているのかを意識的に、より注意深く見つめること、それを通してもっと抜本的な冷戦像の見直し、再構築を目指したものだ。だからこそ分析カテゴリーとしての「社会戦争」の援用を提唱しているのであり、だからこそオーラルヒストリー・アプローチの重要性と有用性を強調してきた。ここで掲げたい問いは以下のようなものになる。

- 普通の人びとは、どのように冷戦状況を観察し、いかにそれに対応し、時にはそれをどのように利用しさえしたのだろうか。
- 個々人のさまざまな想い——例えば、希望、恐怖、苛立ちなど——は、どのようにして共産主義や反共主義といった冷戦イデオロギーの形をとって現れることとなったのだろうか。

こうした点を検証するためには、やはりその時代を目撃し、それを実体験した人びとの声に聞くしかない。

第二点：普通の人びとへの注目

そしてそれが二つ目の提案にあたる。つまり、普通の人びとの夢や希望、苛立ちや恐れといったさまざまな感情や、彼らの葛藤、また日々の選択にもっと注意を向けるべきではないか、ということだ。もちろん、社会・文化的アプローチをとる近年の文献のなかには、冷戦が、いかに人びとの生活や考え方に大きな影響を与えたかを探るものは少なくない。しかし、そうした研究の多くが、草の根の人びとを、時代状況を作り出す主体としてというよりも、与えられた状況の「受け手」としてのみ描く傾向にあるのは否めない。

また、プロパガンダや広報外交、またイデオロギーの研究といった近年盛行をみる分野でも「人びとの心 (hearts and minds)」への巧みな操作が論じられることが少なくない。ただ、それらの研究においても、人びと自体は不在か、もしくはプロパガンダの単なる「受け手」として描かれることが多い。そこでは、人びとの「付き従う」「支持する」というそれぞれの選択によって、はじめてそうしたプロパガンダやイデオロギーがいきいきと活気づき、感動的なものとなり、よりつよく心に残り続ける、という点が見過ごされがちだ。だからこそ、私たちのプロジェクトでは、オーラルヒストリー・アプローチの重要性を強調し、次のように問いかけている。冷戦の名のもと、草の根の人びとは何をしていたのか。一体何が争われていたのか——と。

このように研究の焦点を「普通の人びとは何をしていたのか」という点に合わせることは、単にこれまでの冷戦像に、人びとの行為に関する雑多な知識を付け足すという以上の意味がある。というのは、誰が冷戦世界の主体であったのかを問い直すことは、ひるがえってはそもそも冷戦とは何であったのか、なぜそういう現象が生じたのかを問い直す作業につながる可能性

を秘めているからだ。つまり、人びとの行為に注目し、その声を本格的に取り入れるという方法論的な変化は、単にこれまでの冷戦像に新たな情報を付け加えるというだけではなく、その全体像の見直しを迫るものにもなるかもしれない、ということだ。

ここまで「普通の人びと」という言葉をとくに定義せずに使ってきたが、ここで指し示すのは、なにも社会運動に積極的に参加するような者だけを指すわけでもなければ、国家権力に対し立ち向かった者だけを指しているわけでもない。また、社会のなかで抑圧を受けている者たちだけを指すわけではない。そうした人びと——つまり、従来の「民衆史」や「人びとの歴史 (People's history)」が対象にしてきた「人びと」——も、もちろん私たちのプロジェクトの対象とはなるが、それ以上に私が興味を持っているのは、往々にして社会の多数派であり、社会秩序の形成や維持のために国家権力とも協力し、ときには少数派の疑問や異議、要求を抑圧し沈黙させることで「被害者」というよりは「加害者」となることも多かった「普通の人びと」の声¹²。実際、インドネシア大虐殺をめぐるプロジェクトや、クメール・ルージュ運動をめぐるプロジェクトでは、私たちのメンバーは、冷戦論理を利用した当時の加害者や殺人者にまでインタビューしている。

第三点：冷戦世界への帰納法的アプローチ

ここまでで述べた二つの提案が、分析カテゴリーと研究対象の再考に関わるものなら、三つ目の提案は、それらにどのようにアプローチするかというものだ。そもそも私が「社会戦争」や普通の人びとをめぐる考察を通して提案しようとしているのは、まず冷戦の名のもとでアジア各地に何が起きていのかを探ること、そして、そうした数多くの事例の観察と分析をもとに、冷戦と呼ばれる現象の本質が一体何だったのかを再考することだ。そこで、この三つ目の提案は、そのようなアプローチそのもの、言ってみれば演繹法的考察とは対照的なものとしての帰納法的考察を、冷戦世界の再検討に意識的に用いることである。しかし、このように書くと、戸惑う人もいるかもしれない。なぜならば筋金入りのマルクス主義者をのぞけば、ほとんどすべての歴史家はそもそも帰納法的なアプローチを取るのだから。

にもかかわらず、冷戦世界とそれに関する研究を見てみると、「冷戦型演繹思考」とでも呼ぶべきものが至るところに散見される。典型的な例の一つは、冷戦時代から現在に至るまで根強く残る冷戦型断定思考の広がりに見てとることができる。そうした断定思考は世界を次のように見て、決めつけてしまう。いわく、第二次世界大戦後、世界は東西陣営の二つに分かれ、その影響下でインドでも日本でも、中国でも朝鮮半島でも、またインドネシアやタイでも、それぞれ共産党が台頭し、その党員はモスクワの野望のために仕えている——といったようなものだ。この手の見方は、米国だけでなく、日本でもフィリピンでも、インドでもインドネシアでも、当時からかなり一般的に見られたものだった。

¹² そうした「普通の人びと」をめぐる研究について例えば以下参照：Yoshiaki Yoshimi, *Grassroots Fascism: The War Experience of the Japanese People* trans. by Ethan Mark (New York: Columbia University Press, 2015); Robert Gellately, *Backing Hitler: Consent and Coercion in Nazi Germany* (New York: Oxford University Press, 2001); Wendy Z. Goldman, *Terror and Democracy in the Age of Stalin: The Social Dynamics of Repression* (New York: Cambridge University Press, 2007).

もう一つのタイプの「冷戦型演繹思考」は、先にも紹介した「冷戦お天気史観」の立場を取る文献にも見ることができる。結局のところ、そうした研究は、社会、文化、人びとの暮らしのなかに冷戦の要素を見つけ出そう、とすることから研究を始めがちだ。もちろんそうしたものを見つけ出すのは容易なことだ。ただ、そうしたものの見方では、そもそも冷戦とは何だったのか、といったような根源的な問いが投げかけられることはない。むしろ、既存のステレオタイプに沿った現象が数多く報告され、そのため、既存の「冷戦」像がより一層、強固なものとなっていく。そこから抜け落ちがちなのは、そうした研究によって冷戦とは無関係と決めつけられた物事だ。それが本当に無関係かどうか検討されていないにも関わらず、だ。

そこで私が提案したいのは、そうした「冷戦型演繹思考」、つまり冷戦に関する先入観や決めつけを意識的に避けて、当時、実際には何が起こっていたのか、また人びとの間では何が争われていたのかをまず多くのケースを通して探り、そうすることで帰納法的に、私たちが「冷戦」と呼ぶ現象の本質とは何かを再考することである。

第四点：「方法としてのアジア」&「冷戦アジア」の再考

これまで述べてきた三つの提案、すなわち、「社会戦争」やそのアクターである普通の人びとに注目すること、そして帰納法的アプローチを取ること、そしてこのプロジェクトの地理的な意味での焦点——つまりアジアへの注目——を併せて考えると、多くの人は、このプロジェクトの目指しているものが、アジア特有の歴史的状況や展開を捉えてそれを検討することにある、と見るかもしれない。それは必ずしも間違っていないが、それ自体が最終目標というわけではない。そもそも私たちは、アジアが欧米とは異なっただけで冷戦を体験した、と主張するためだけにローカルな事情を詳述したわけではない。究極的な目標はむしろ、ここで得た知見をもとに冷戦世界そのものを再考すること、つまり、アジアを他地域の再検討へ向けた「方法」として提示していくことにある。

そうした狙いを念頭に置いて、研究対象をただ「アジアにおける冷戦 (The Cold War in Asia)」と設定するのではなく、「冷戦アジア (Cold War Asia) の見直し」、と位置づけてみることを提唱したい。これが四つ目の提案となる。というのは、先にも論じたように、「アジアにおける冷戦」という枠組みで冷戦にアプローチすると、冷戦がいかにアジアで展開したか、という点に意識が向かい、その結果、冷戦を台風や大雨のような天候として描きがちで、その本質を問いただすような根本的な問いを立てにくくなる。さらに悪いことに、「アジアにおける冷戦」という枠組みを使いつづけた場合、欧米諸国で展開した「本来の」冷戦とは異なる、アジアにおけるローカルな特殊性に目が行きがちになってしまう。その危険性は、そうすることで、アジアでは異なる冷戦経験があったという補足説明を加えるにとどまり、欧米世界で展開したとされる従来型の「冷戦」には手つかずのまま、その維持に貢献してしまう、ということだ。

一方、「冷戦アジア (Cold War Asia)」の見直しという枠組みだと、その形容詞（「冷戦」）自体に疑義を投げかけたり、それを再考したりする余地を残すことができる。つまり、本当に重要だったのは冷戦だったのか、そのほかのさまざまなダイナミクスが存在していたのではないのか、という問いを持ち続けることができる。そうしたアプローチを取ることによって、多くの人び

とにとって最も切実な問題は、グローバルな米ソ対立よりも、国内社会における、またコミュニティ内における、社会的、文化的、個人的な葛藤や対立であったかもしれない、という点を議論しつづけることができる。

実のところ、こうした点は、ラテンアメリカ研究者のアラン・マクファーソンが「ラテンアメリカ冷戦研究のパラドックス」と呼ぶものとそっくりなものだ。マクファーソンいわく、「歴史家が南米の冷戦について調べれば調べるほど、その冷戦自体が背景に薄れていく」——と¹³。つまり、「冷戦アジア」という枠組みを使うことは、「冷戦」を相対化したり再考したりするのに適しているだけでなく、アジアを方法として提示していくのにも適しているように思われる。この枠組みでもって、例えば、「冷戦ラテンアメリカ (Cold War Latin America)」「冷戦アメリカ (Cold War America)」、また「冷戦世界 (Cold War world)」などの比較史的、またグローバル史的な再検討へと、道を開いていくことができるのではないだろうか。

第五点：過渡的仮説としての歴史

ここでの最後の提案は、オーラルヒストリーという方法そのものに関わる重要な問題で、過渡的仮説としての歴史の性質をもっと自覚するべきではないか、ということだ。この点は、1990年代以降隆盛した「記憶の政治」をめぐる研究動向にも直接関わるものといえる。オーラルヒストリーという手法自体は長い歴史を持つが、それでもつねに傍流的な立場にあったことは否めない¹⁴。そもそも一般的に言って、人は自分の好きなように過去を記憶してしまう生き物だ。また、これまでの「記憶の政治」に関わる数多くの文献が示すように、集合的な記憶のあり方も、その時代時代の社会的、政治的状况によって変化してしまう。したがって、歴史的な史料としての信頼性はどうか、という疑義が生じるのも無理はない。

実際、オーラルヒストリーが本質的に内包するこうした問題については、頭を抱えることも多かった。というのは、せっかくインタビューを行っても、事実を誤認したまま滔々と語られることもあったし、また、根も葉もないうわさでありながらも、単にそれが人口に広く膾炙しているということで、それが事実として記憶されていることも少なくなかった。しかも、悩ましいのが、そうした彼らの「事実」が、今なおつづく社会的・政治秩序の維持に貢献していることが少なくないケースで見られたからだ。ここで問われるべきは次のような問いだ。ある社会の構成員の多くが過去を都合よく記憶している（しようとしている）場合、どう対処すべきなのか——と。

ここにおいて、おそらくオーラルヒストリーを実施、収集する際の姿勢と、それを歴史化する際の姿勢は同じではありえないだろう。前者においては、たとえ明らかに間違っていたとしても、いかにも嘘っぱちであったとしても、それが意図的、非意図的であるかを問わず、とりあえずそれを聞いていき、生の声として集めていく、という姿勢が求められるだろう。た

¹³ Alan McPherson, "A Paradox in Latin American Cold War Studies," Garrard-Burnett, Lawrence, and Moreno, *Beyond the Eagle's Shadow* (2013), 307.

¹⁴ オーラルヒストリー・アプローチについて例えば以下参照： Robert Perks and Alistair Thomson, *The Oral History Reader* 3rd edition (New York: Routledge, 2016); Paul Richard Thompson and Joanna Bornat, *The Voice of the Past: Oral History* 4th edition (New York, Oxford University Press 2017).

だ、後者、つまり、それを歴史化していく際には、ほかのインタビューやほかの史料と突き合わせる作業や、ただ単にインタビュー内容を鵜呑みにしないといった姿勢が求められることになる。

ただ、こうした信頼性への不安自体が、オーラルヒストリーという手法を用いることの妨げになるわけではない。そもそも相当量の人びとの声や記憶を集めなければ、そうした「記憶の政治」の問題を論じることすらできない。記憶がいかにか恣意的で流動的のあるものか、いかにそれが現在の社会、政治秩序と関連するかを検討するためには、まずそれを集めてみないことには、議論にすらならない。さらに、信頼性という点で不安定な基盤の上に成り立っているという性質は、なにもオーラルヒストリーに限られた話ではない。たとえ統計資料であれ外交文書といった公文書であれ、そもそもそこに書かれたことを鵜呑みにすべきではないし、ほかの資料と突き合わせる作業はそもそも必要なものだ。つまり、オーラルヒストリーの抱え持つ信頼性への不安というものは、むしろどんな種類の「歴史」も、結局のところ、限られた断片的な資料に基づいた、いわば永遠に過渡的な試みであることを、私たちによく思い起こさせてくれる警鐘として捉えるべきで、オーラルヒストリー自体を否定するものではないだろう。

そして、これが実は五つ目の提案だが、こうした過渡的な仮説としての歴史の性質を、いさぎよく受け入れてはどうか、というものだ。そもそも、歴史を、それが何であれ、鵜呑みにすべきではないだろう——と。この点を主張することで、私は、記憶研究 (Memory Studies) と、歴史研究の両分野における、記憶をめぐる二大潮流から距離を置いているつもりだ。やや単純化した区分けになるが、一つは、記憶研究の分野の初期展開時によく主張された見方で、人びとの記憶をより「真正」のものとして捉え、それが公的な歴史や文字によって書かれた歴史に埋もれてきたことを問題視し、それがゆえに記憶を歴史から救い出すことの必要性を唱えるアプローチだ。もう一つのアプローチは、これに対する実証主義歴史家の反撃のようなもので、記憶というものが、いかに不安定で漠然とした性質を持っているか、いかにそれが恣意的で流動的なものであるを指摘し、歴史を記憶から救い出すことの必要性を主張するアプローチだ。

これらのアプローチは一見したところ対立しているように見えるが、実は、決定的なところで、両者は一つの前提を共有している。それは、記憶を通してであれ、歴史を通してであれ、両者ともに、何らかの「真実」、つまりなんらかの最終的な結論に到達できるはずだ、という考え方を共有している点だ。本当にこのどちらかの立場を選択する必要があるのだろうか。いや、おそらくその必要はない。もちろん、オーラルヒストリー・アーカイブを主催する以上、私が文書化・歴史化されていない人びとの記憶に重要性を見出そうとしているのは言うまでもない。ただ、それを隠されていた「本当の声」として、もてはやするのは安易に過ぎるだろう。また、私をふくめ、歴史家というものは、文字通り数え切れないほどの事実を集め、それを総合的に分析することで、なんらかの結論にたどり着けるものだ、という実証的な姿勢を持つものだ。ただ、そうした実証的、つまり文書化された「事実」以外を恣意的で信頼性に欠けると切り捨ててしまうのもやはり早計だろう。つまり、上記二つのアプローチのどちらかを選ばずとも、その中間地点あたりに陣取り、そもそも歴史とは断片的で過渡的なもの、いわば永遠に仮説的でありつづけるものだ、という歴史の本質を自覚して受け入れることは何ら悪いことではないように思われる。

終わりに

こうした認識を相対主義の悲しい兆候として嘆く必要はない。むしろ、こうした認識は、いまの相対主義の時代、またそれに対する巻き返しが世界各地で吹き荒れている今日という時代にこそ、重要性を増していると思われる。振り返ってみれば、私が著書『人びとの冷戦世界 想像が現実となる時』（岩波書店、2021）やここで紹介したプロジェクト「Reconceptualizing the Cold War: On-the-ground Experiences in Asia」を通じて行ってきたことは、言ってみれば、20世紀史における冷戦ナラティブの持つ比重を相対化し、「社会戦争」や普通の人びとの日々の争いを検証することによって、政治世界の社会的、歴史的構築性が見えるようにしようとするものだった。言い換えれば、これらのプロジェクトは、「現実」が社会的に構築される際の想像力の役割と、そうした想像された「現実」への社会的要請とその作用について考えようとする試みだったといえる。

そうしたプロセス——冷戦史の「学び捨て（Unlearning）」と学び直し（Relearning）の過程——のなかで、私が気付いたのは、「現実」や「歴史」が本質的に抱えもつ、一種危うい社会的機能だった。それはすなわち、本来、複雑極まりない事象を簡単でわかりやすいパッケージ化されたものとして世の中に提供してしまう、という作用だ。言い換えれば、ひとたび多くの人びとの間に浸透して支配的な地位を確立してしまえば、いかなる「現実」や「歴史」も、人びとがより深く考えることを封じ込める思考停止装置として機能しかねない、ということだ。そのおかげで、人びとはいちいち考える手間を省いてしまうのだから。そして、こうした点を私たちが自覚することは決して無意味ではない。というのは、それは、私たち自身の「現実」と「歴史」も、想像され構築されたものであるということをつねに思い起こさせ、私たちをより注意深くさせてくれるからだ。

換言すれば、私がここで提案しているのは、ただ単に相対主義の潮流に抗うのではなく、それをむしろ取り入れることで、支配的・権威的な見方を鵜呑みにしない、そして情報の大海のなかで自ら考えることができる個々人を育てていくことができるのではないか、ということだ。そしてそうした力量こそが、この相対主義の時代、そしてフェイクニュースや都合のいい歴史であふれかえる今日の時代、私たちが本当に必要としているものなのではないだろうか。そういった意味で、アジア各地からのさまざまな声を集めようとする私たちのオーラルヒストリープロジェクトは、今日の人びとにとって、励ましでもあり警鐘でもある貴重な一次史料の宝庫になると信じている。